

## 「日本語教育の参照枠」における評価の考え方について（案）

### 1. 「日本語教育の参照枠」における言語教育観に基づく評価の理念

○ 以下の三つの言語教育観の柱をもとに評価の理念を示す。

- (1) 日本語学習者を社会的存在と捉える
- (2) 言語を使って「できること」に注目する
- (3) 多様な日本語使用を尊重する

- 評価の理念：
  - (1) 生涯にわたる自律的な学習の促進
  - (2) 学習の目的に応じた多様な評価手法の提示と活用推進
  - (3) 基準（尺度）と評価手法の透明性の確保

### 2. 「日本語教育の参照枠」における言語能力観と評価

#### (1) “evaluation”と“assessment”

【教育プログラムの評価】(CEFR 追補版, 日本語訳 p.189)

“evaluation”

- ・学習者の熟達度についての“assessment”
- ・実際に産出されたディスコースの種類や質
- ・学習者/教師の満足度
- ・教育の効率性

○ CEFR では、評価の議論には、基本となる以下の三つの概念があるとしている。

#### ・妥当性 (validity)

ある評価の手法が、当該の状況で、測定することを意図した特性（構成概念）を実際に測定しているか否かに関する概念で、そこで集められた情報が当該の学習者の熟達度を正しく示しているかなどが相当する。

#### ・信頼性 (reliability)

測定値や評価値の精度のことを言い、例えば、時間間隔を置かずに2回基本的に同じ評価が（実際に、または仮定の上で）実施された場合、そこで評価された学習者の序列が同じになるかなどが相当する。

#### ・実行可能性 (feasibility)

その評価の手法が現実的に実行可能であるかどうか。

#### (2) 何を測るのか（日本語能力とは何か）

- ・CEFR をもとに、日本語能力を構成する要素を幅広く示す。
- ・CEFR では、言語使用者・学習者の熟達度 (proficiency) を下図のように示している（例示的能力記述文が示されているのは赤枠内）。
- ・「日本語教育の参照枠」における日本語能力の構成についても、以下の四つの能力で表すことができる。

\* 一般的能力 :

言語の使用に必要となる知識, 技能, 姿勢・態度, 学習能力から成る

\* コミュニケーション言語能力 :

言語構造的な能力, 社会言語的能力, 語用論的能力から成る

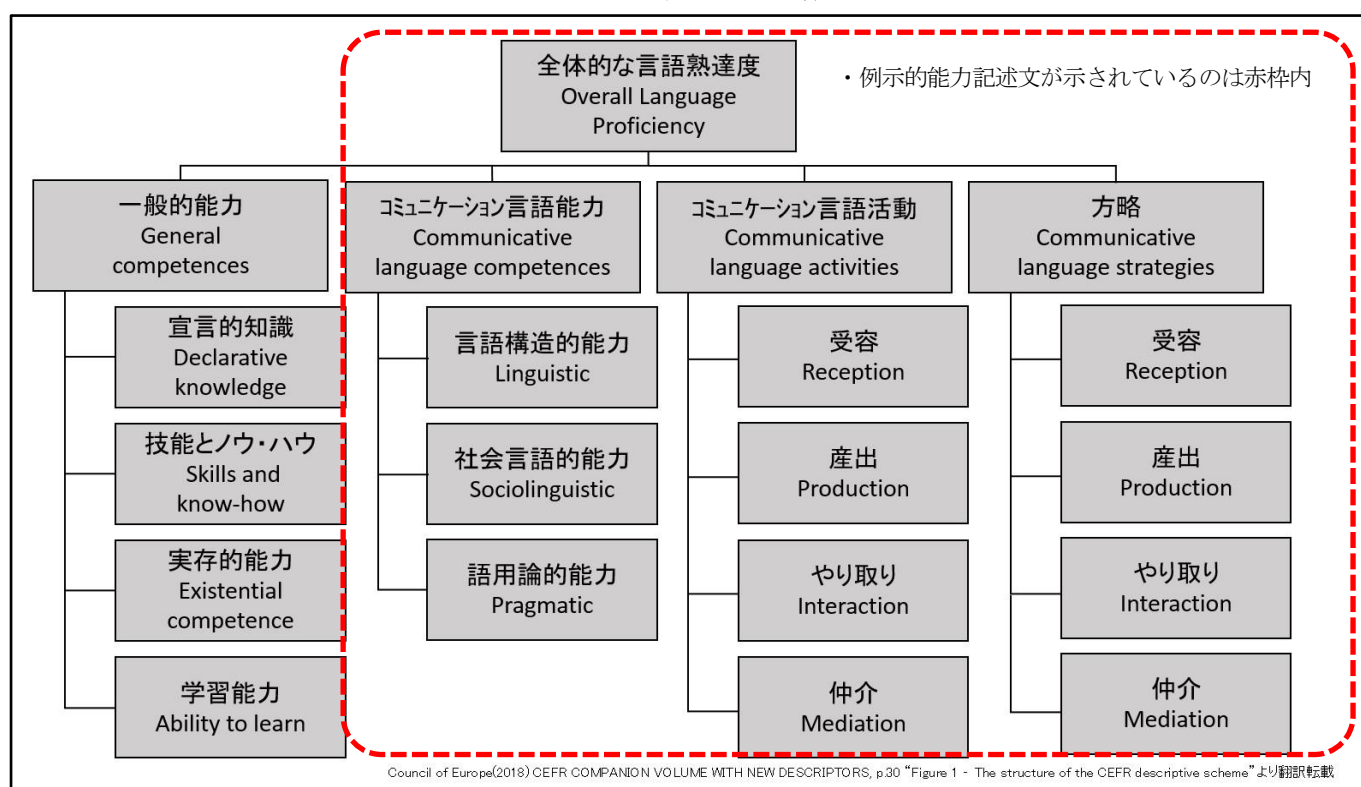
\* コミュニケーション言語活動 :

受容, 産出, やり取り, 仲介からなる

\* 方略 :

受容, 産出, やり取り, 仲介からなる

### CEFR 例示的能力記述文の構成



### (3) 学習者の日本語能力の熟達度をどのように測るのか

#### (多様な“assessment”の在り方)

- ・試験による評価
- ・パフォーマンス評価
- ・ポートフォリオによる評価 など

### 3. 活用方法

- 日本語能力の熟達度評価の結果をどのように活用するか
  - ・試験内容を特定, 開発する際に活用できる
  - ・学習対象の到達度の基準 (ものさし) を決める際に活用できる
  - ・異なるテスト間の測定道具としての共通性および違いを明確にできる
  - ・学習者が自身で言語能力の目標設定や評価 (到達点の確認, 調整) についての見通しを持つことができる (自律的学習者の育成)
  - ・国や機関を超えた共通の日本語能力評価ツールとして活用できる

#### 4. 評価の種類

##### (1) 教師による評価

- ・ 観察, 面談 (授業中, 期末面談等)
- ・ 提出物 (宿題, ポートフォリオ)
- ・ 試験 (含むポートフォリオ, パフォーマンス評価)  
\* 優良事例の提示

##### (2) 学習者による評価

- ・ ポートフォリオ, ルーブリック等に基づく自己評価  
\* 優良事例の提示

##### (3) 学習者の周りの人による評価

- ・ 学習者同士の評価 (教育場面)
- ・ 職場の人による評価 (就労場面)
- ・ 家族隣人による評価 (生活者)  
\* 優良事例の提示

##### (4) 大規模試験による評価

- ・ 言語能力の熟達度を測るための試験
- ・ ビジネス場面などの領域別の試験
- ・ ICT 技術を活用した試験  
\* 優良事例の提示

#### 5. 日本語の大規模試験と「日本語教育の参照枠」の対応関係を示す方法

○ マニュアルでは, C E F R への対応付けのための次の 5 つの手続きを提示する。

##### (1) Familiarisation (習熟化: C E F R への理解を深める)

対象となる資格・検定試験の関連付けを行う専門家集団 (パネル・メンバー) に対し, C E F R, そのレベル区分, 能力記述文への理解を深める研修を行うこと。

##### (2) Specification (明確化: 対象となる資格・検定試験の自己点検)

資格・検定試験の問題内容や問題タイプについての自己点検を行い, 当該試験の出範囲が C E F R と関連付けられること。

##### (3) Standardisation training and benchmarking (標準化トレーニング/レベル設定)

パネル・メンバーが基準設定 (資格・検定試験のスコアを C E F R に関連付けること) を行うため, パネル・メンバーの間で共通認識を得ること。

##### (4) Standard setting Procedures (基準設定手順)

パネル・メンバーがグループでの数次の審議を経て資格・検定試験のスコアを C E F R の段階別表示に位置付けること。

(5) Validation (検証)

上記1～4の手続きが適切に行われているか、継続的に検証すること。

6. 社会で活用される日本語能力を判定する大規模試験に求められる要素について

- 野口・大隅(2014)では, Bachman,L & Palmar,A(1996)および Cambridge Assessment English を参照し, 社会で活用される日本語能力を判定する大規模試験に求められる要素を以下のように示している。

(1) 有用性 (usefulness)

- ・その試験の総合的な価値を, 個々の観点から見た価値の総和として捉えた概念。

(2) 実用性 (practicality)

- ・試験開発およびその後の継続に関わるリソースに関連し, 試験を物理的・経済的に成り立たせるための前提条件である。

(3) 妥当性 (validity)

- ・試験が測ろうとしているものを測れるように作られているかどうかの程度を表す概念, 一般的に内容的妥当性, 基準関連妥当性, 構成概念妥当性の三つの観点から検討される。

(4) 信頼性 (reliability)

- ・その試験が信頼できるかどうかについての概念であり, 信頼性係数という数値で表すことができる。

(5) 真正性 (authenticity)

- ・試験の課題項目がその試験で測定しようとしている目標言語使用領域における現実の課題をどの程度反映しているかの度合いをいう。

(6) 波及効果 (washback effect)

- ・試験の内容が受験者や教師, 教育機関, 企業, それら関係者を含む社会に与える影響のことを言う。

\*上記要素を具体的にはどのように担保していくかについて検討の上, 記載したい。

以上